感染殺人～バイオキリング～

流星群

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
感染殺人～バイオキリング～

【Ｎコード】
Ｎ３８５１Ｚ

【作者名】
流星群

【あらすじ】
これは人の命を助ける――そんな感動的で素晴らしい物語ではない。生まれながらにして殺人鬼の主人公が、殺人鬼共を？狩る（ハウンティング）？話。

【ｃｈａｐｔｅｒ１－１】（前書き）

《作者からの一言メモ》
新しく書き始めた小説です
電撃大賞用で、各話が８０~１３０ぐらいいくと思います（電撃大賞の上限と同じ枚数にするので）
ですから、賞に送る前に、感想、評価等をしてくれたら作者が大喜びします！
書き終わること前提なので、長い目で見てください

【chapter1－1】

「絶対にコロス！」

狼は一匹の兎（えもの）を狙っていた。

真夜中の路地裏は、空の色より更に闇（くら）い。ぽつりと立っている電柱の、心許ない明かりだけがそこら辺を照らしていた。汚物やらゴミやらが散乱し、より一層不気味にさせている。

そこを二つの影が通る。

息を切らし、ゴミに躓きながらも必死に走る兎。それを難なく追う、狼。

彼らはかれこれ一時間以上も走り続けていた。

人がいれば、狼はその場を撤退し、兎の命は助かっていただろう。けれど、夜中とあって、しかも路地裏では人の気配さえもない。

「コロスコロスコロス！！」

狼はもう何度目かの怨嗟を口にしながら、右手に握り締めていた黒光りする硬い物体――拳銃を兎に向け、引き金を引いた。

パンッ！！　と乾いた発砲音がし、ビルの外壁に大人の親指程度の小さな穴が空いた。

兎はヒイイイッ！　と叫び声を上げながら曲がり角を右に逸れる。

「いいぞいいぞ！　徹底的に追い詰めてやる……。コロシてやる！　ククククッ……ハハハハハハッ！！」

歯をむき出しにして高らかに笑い、銃刀法違反の日本で拳銃を持ち歩く姿は、まさに獲物を狩る狼（ハンター）のごときである。

こうして狩人は、拳銃で獲物を脅し、表通りに出られないように誘導していたのだ。

路地裏の、もっとも深い場所へと引きずり込むために。

闇の奥へと誘う獲物を、狩人は口元を不気味につり上げて、悠々と追いかけていた。

絶好の好機を伺うべくして、時を待つ。そして、その好機は、突然にして巡ってきた。

「ぜぇぜぇ……。はぁ……うっ、嘘だろ！！　何で！　どうして行き止まりなんだよ！！」

彼らが最終的に行き着いた所は、ビルの壁で囲まれた行き止まり。薄汚れた壁に背を預けて獲物はずるずるとへたり込んだ。どうあがいても逃げられないと悟ったからだろう。狩人は、ゆっくりと獲物に近づいていく。

ビビビと、虫共が群がる電柱の下に、彼らの顔が曝される。

獲物はまだ若かった。齢一五、六ぐらいの少年。金髪に染まった髪が汗で頬に張り付き、顔は苦痛で歪んでいる。元々綺麗だったのだろう制服は汚れ、茶色がかっていた。

対して狩人の方はというと……彼も若かった。金髪の少年と同年代である。黒髪で眼鏡を掛け、どこか陰鬱そうな印象を受ける。けれど、彼は金髪少年とは違い、汗を一つもかいていない。出来損ないの笑みを浮かべ、余裕そうにしていた。

【chapter1－2】

呼吸がやっと整い、まともに話せるぐらいになって、金髪の少年は口を開く。

「霧戸（きりと）！　俺が何したって言うんだ！」

霧戸と呼ばれた黒髪眼鏡の少年は笑顔を消し、唇を噛みしめて怒りを露わにする。

「ダマれ！　僕は君をコロサなければ気が済まない！」

「ちょ、ちょっと。お前、本気で言ってるのか？」

じりっと背後の壁へ更に後退する金髪少年。身体は小刻みに震え、みっともない姿だが本人はまるっきり気にしていないらしい。

滑稽な姿の彼を見て、霧戸は笑みを浮かべるぐらいの余裕がまた生まれた。

「ホンキだ。君が僕に何をしてきたのか覚えてるよな？」

「だって、あれは！　お前をからかってただけで……！」

「ウルサい！」

思い出したくもない当時の出来事が鮮明に頭へと流れてくる。自分をあざ笑う彼らの声。殴り飛ばされた時の痛み。心に刻み込まれる屈辱の数々。それらがずっと霧戸を苛み、今の今まで消える事の

ない記憶(あざ)となっていた。

霧戸は奥歯をギリっと噛みしめる。忌々しい思い出をもかみ砕くぐらいに力強く。

「いいですか御堂様。御堂様はからかっていただけかとお思いになるかもしれませんが、僕は大変傷つきました。痛かったです。苦しかったです。涙が出ました。止めてください、と懇願したのに、でも御堂様は止めになりませんでした。僕が何を言っても！」

過去の思い出を無理矢理記憶の奥底から引っ張り出し、霧戸はそれを言う。

御堂と呼ばれた金髪少年は、霧戸の話を聞いて、はっとしていた。

「お前、その言葉遣い……」

「御堂様がこうしろと言いましたよね？」

「それは、悪ふざけが過ぎたというか……」

「悪ふざけなら何でも許されると思うんですか？」

「ごめん！　この通り謝るから、お願い！　許してくれ。殺さないでくれ！」

額をついて許しを請う御堂の姿に、霧戸の心は憎しみで溢れかえっていた。

「謝るから、許してくれ……？　フザけんな！　僕がどんな思いで

いたのか知りもしないくせに！　今更謝ったって何もかも遅い！！」

激情のあまり、口調が戻っていた。でも、もうそんなことは気にしなくていい。どうでもいいのだ。霧戸はこれから、御堂にびくびく怯えなくても、痛い思いもしなくても、恥辱に耐えなくてもいいのだ。だって、彼をこの手で始末するのだから。

「もういい。これ以上話しても無駄だ」

不穏な空気を察したのか、電柱に群がっていた虫達が一斉にどこかへ飛び去ってしまう。

空よりも、路地裏よりも濃い何かが、霧戸の体内から外へと放出される。

【chapter1－3】

それは一見して、靄のようだった。

霧状であるため、形は存在しない。ふわふわとと舞うその靄は、霧戸の身体を包み込むようにしていた。まるで、彼を身の安全から守るかのように。

川や湖、海や山に姿を見せるそれが、何故か路地裏から突如出現した。

これだけで奇妙だが、その出現した場所が、人間の身体からである。

加え、霧というのは、大気中の水蒸気が冷却され、小さな粒状の水滴となり、地面近くを浮かんでいる状態である。

けれど、今は、蒸し暑い真夏の夜。普通ではあり得ない話だ。

更におかしなことがある。

靄や霧は水蒸気、つまり水であるため、無色透明なはず。けれど、霧戸の周りに漂う靄は黒かったのだ。墨をまき散らしたかのように。

「何だ？　何をするつもりだ！」

「君には分からないよ。絶対。僕のことを知ろうともしなかったんだから」

御堂は霧戸に起きた異変に気づいていない。黒い靄は、一般人には見えないのだ。なのに、彼は不自然に怯えていた。何か、この世

ならざる気配でも感じ取ったのかもしれない。

霧戸は左腕を身体の横に水平に持ってくる。すると、今まで霧戸の周りに漂っていただけの靄が、彼の左手に集まっていく。そして、何かを形作っていく。

数秒の後に出来上がったのは、拳銃だった。右手と併せて二丁の拳銃が彼の手に収まっている。

「なっ！　お前、今何をした！」

御堂は驚愕を張り付かせた顔をしていた。

彼からしてみれば、突如拳銃が虚空から現れたように感じたに違いない。手品と同じような感覚である。たとえ、種をバラしたとしても、御堂には一生分からないだろう。

黒い靄――【闇】と呼ばれるもの。これは、怨み、嫉妬、僻み、殺意、悪意、敵意、といった誰しも人間の心の中に棲む醜悪の基。負の感情である。

この黒い靄が、人間の欲望――負の感情――を叶えようと力を授ける。靄とはいえ、様々な形になり、また形を変えることが可能。そうして、形作られたものが【殺戮兵器】となるのだ。

兵器（武器）と命名されているが、もっと分かりやすい言葉でいうならば、人を殺す能力である。

殺人鬼によって能力の系統は大きく異なる。

基本的には四の系統があり、霧戸は武器具現化系統に属している。闇を武器として具現化させる能力である。武器の種類は本人の既知の物に限るが、おおよその武器になり得る物なら全てである。近代武器から、古代の武器に至るまで含まれている。

他の能力に比べると殺傷能力に幾分劣るデメリットがある代わりに、最小限の闇で扱えることや、いくつもの武器を同時に扱えることや、闇が形作るのに時間が掛からないなどのメリットがある。

霧戸はどうやって御堂に復讐をしようかと企んでいる時に、たまたまインターネットで銃の事を調べていた。だから、拳銃を武器として発現させることが出来たのだ。

「君をコロスために準備をしただけだ」

憎しみを込めた瞳で、御堂を睨み付ける。

両腕を持ち上げ、御堂に拳銃の標準を合わせ、引き金に指を伸ばす。

「止めてくれ！　お願いだ、頼む！」

彼は、自分がしてきたことに対して反省するどころか、最期の時まで自分の身の安全を守ろうとしていた。

我が身可愛さに出た行動に、霧戸の内部から怒りが泉のように沸き出す。

これ以上生かすだけの価値は無いと判断した。

「楽にシネると思うなよ」

発砲音は途絶えることなく、何度も夜の静寂に響いた。

【chapter1－4】

弾倉から全ての薬莢がはき出された頃、辺りは静けさを取り戻していた。
途端に、火薬と鉄の臭いが鼻につく。でも、決して不快ではない。むしろ、全部に片が付いたことがより現実として理解出来、清々しい気持ちにさえしてくれた。

気づくと持っていた二丁の拳銃は元の黒い靄となり、そして風に乗ってどこかへ飛んでいってしまった。

「こ、これで僕は……自由になるんだあああああアアア！」

興奮のあまり、霧戸は大声を出して飛び跳ねた。
いつまでもここでこうして喜びに浸っていたかったのだが、誰かに見つかったら元も子もない。折角彼らから解放されたのに、今度は刑務所でお世話になったら、今までしてきた全てが報われなくなる。

後ろ髪を引かれながら振り返ると、そこに――いた。

電柱の明かりが、その人物と乗っているバイクを照らす。

ソイツは、バイクのエンジンを止め、慣れた動作で下りた。
高い。ヘルメットの高さ分を引いても、霧戸より頭一つ分ぐらい上に顔があり、百七十センチは余裕で超えているだろう。中肉中背で、真夏だというのに、サラリーマンが着ているようなリクルートスーツをしっかりと着用していた。

ソイツはヘルメットを脱ぎ、素顔を曝らす。短髪黒髪の少年の顔が闇夜に浮き上がる。
もっと年がいっているのかと霧戸は思っていたのだが案外若かく、内心驚いていた。同い年ぐらいか、一つか二つ違いだろう。十八歳だと思われる。

彼は上着も脱ぎ始めた。白いシャツが露わになる。そのシャツは右の袖部分がなかった。代わりに、右腕には包帯がぐるぐると巻かれている。

「い、いつからそこにいた！　いつから見ていた！」

彼の不気味な雰囲気にあてられて、言葉を失っていた霧戸だったが、ようやく口に出来た。
自分の声が想像以上に震えている。声だけでなく、腕も足も、身体全体が恐怖で怯えていた。アイツは危険だと、警告音が頭の中でウルサイぐらいに訴えかけてくる。

「……」

少年は何も発しない。会話する余地すらないとばかりに。

前方しか行くべき道はない。だが、そこには少年が立ち塞がっている。とてもじゃないが、彼が易々と霧戸を逃がしてくれるとは思えなかった。殺人現場を見られてしまっては。

「おい！　何とか言えよ！　黙ってるだけじゃ何も分からないんだよ！」

全身の震えを抑えつつ叫ぶ。だが、当然のごとく少年は何も言わ

ない。

彼は一歩霧戸の方へと近づき、右腕を払った。生きているかのように、巻き付いてた包帯が右腕から解けていく。

「そ、それは……！！」

少年の右肩から――黒い靄が出ていた。

【chapter1－5】

「ひぃいいいいい！」

情けない声を上げて、霧戸はへたり込んだ。そのまま少年から下がっていく。でも悲しきかな、後ろにあるのは壁。行き止まりだった。逃げ場はとうにない。

横を向くと、血だらけの死体となった見知った顔の人間がいる。

「僕もコロされるのかよ！　イヤだイヤだイヤだあああああああああッ！！　死にたくない！　やっと！　やっと僕は束縛から解放されたんだ！　なのに、こんなのって……酷いよ……」

心からの叫びが、少年の耳に入っている様子はない。霧戸は知らぬ間に涙を流していた。

彼は無表情で霧戸を見下ろし、こちらに一歩ずつ近づいてくる。黒い靄は黒い右腕を形成し、いつのまにか右手には刀を携えていた。あれで呆気なくコロされるのだろうか。

「お願いだ、僕を見逃してくれよ……」

つい先程聞いたばかりの言葉を、掠れた声で霧戸は漏らしていた。御堂の言葉だ。相手にしたことは自分に返ってくるということなのか。人生の最後にこんな大切なことを学ぶなんて……もっと早くから知っておきたかった。

少年の冷たい眼差しと、刀が目と鼻の先に迫る。

「助けて……！！」

最後の悪あがきとばかりに、少年の細い両足を力強く掴む。けれど。

「あっ！」

いとも簡単に足で払われ、両手を離された。そして、風を切り裂くビュンッ――という音と共に、霧戸の首目掛けて刀が振り下ろされ、唐突に視界が反転。少年の足下がはっきりと見える。

この時、首を切られたのだと理解した。痛みさえもないぐらいに、ばっさりと。

少年はポケットから携帯を取り出し、霧戸を写真に納めた。

事が済んだのか、少年は霧戸から遠ざかり、バイクのある所まで向かう。地べたに蜷局を巻いていた包帯が生き物のようにシュルシュルッと動くと、彼の義手になる。

ヘルメットと上着を被り、彼はバイクに跨った。エンジンをふかして、一度も振り返る――霧戸を見る――ことなく、その場を立ち去る。

彼がいなくなって程なくして、霧戸の視界に白い霧がかかり始める。それと共に、急激に眠気に誘われる。これが死というものなのかもしれない。

後悔、無念、怒り、悲嘆といった運命の非常さを呪う言葉で心が溢れかえると思っていたが、意外にもそんな言葉は出ず、むしろ、安らかに眠れる気持ちよさに安堵していた。

薄れていく景色。もうほとんど何も見えていない。死がすぐ近くまで来ているのだと確信した。だから、最後に何か言いたかった。声に出すことは出来ないが、でも、ありったけの思いを胸に秘めて死のうと思った。

早くしないと死ぬという焦りで、これでいいか、と半ば投げ遣りで最期の言葉を締めくくった。

――さようなら。

【chapter1－6】

†

「依頼を遂行してきました」

鳳外人弟（ほうがいひとで）は【鳳外ビル】に帰還するとビルの最上階である二十階の部屋を目指した。

そこは豪勢にも、一フロアを丸ごと使った部屋で、壁が全面金色のガラス張りだった。ここからならば、美しい夜景を一望出来ることだろう。

金の羽毛で出来た絨毯が床に敷き詰められている。中央には、金箔をまぶした脚の短いテーブルが置かれ、そこに金の革のソファが左右に対峙する形で置いてある。

その向こう側では、金ピカの細長いデスクに肘を突いて座っている大柄の男がいた。

あの男がこのビルのオーナーにして最高責任者、鳳外絡繰（からくり）である。

絡繰の横には常に全身黒ずくめの男が二人控えている。男らは、絡繰に何かあった時、身を挺して彼の命を守る、護衛役。面識のある者でも絡繰は警戒を怠らない。たとえそれが、息子――人弟であってもだ。

カタギではない人間がこのビルに何人も雇われているが、仕事は絡繰を守るだけではない。このビルは名目上宿泊施設となっており、各部屋の掃除や雑事、更に、ビルに訪れてきた来客者の身の世話をする。簡単に言えば、ホテルのボーイに、荒仕事をプラスしたよう

なものだ。

「そうか……じゃあ、お前。依頼者を呼んでこい」

「はっ！！」

絡繰が、横に控えていた男に目で合図をすると、その男は返事をし、人弟に一礼して部屋を出て行った。

絡繰は吸いかけの金の煙草を金の灰皿でもみ消し、立ち上がる。彼は金のジャケットを羽織り、金のパンツを下に着ていた。どれもオーダーメイドで、合計うん千万はくだらない。加えて、うん百万はするだろうゴールドの腕時計を右腕に身につけていた。

全身黄金色の男が目前にやってくる。煙草の臭いが鼻についたが、嫌な顔一つしない。敬意を表すため、人弟は腰を落としてわざと自分の身長を下げた。

「どれ、証拠を見せてみろ、人弟」

「分かりました」

「ん……どうした？　何をじっと見ている？」

絡繰は疑問の眼差しを向けてくる。

「いえ、その……目の方は大丈夫でしょうか？　痛みや不快感、違和感はありませんか？」

絡繰の右目は金の眼帯で覆われていた。とある出来事が原因で彼の目は失明し、代わりに今は義眼を入れている。その出来事を作った張本人が人弟であった。

だから人弟はいつも彼の右目を気に掛けていたのだ。

【chapter1－7】

そんな人弟の心配をよそに、絡繰は露骨に表情を歪める。

「お前に心配される覚えはない。お前は医者か？」

「いえ、違います」

「なら、つまらんことをいちいち聞くな。己のことなど己が一番よく知ってる。ましてやお前は医者じゃない。それとも何か？　この目をお前は治してくれると、そう言うのだな？」

右目を指さして、絡繰は口角泡を飛ばす。ギラリと光る金歯が見えた。

「失礼しました。以後このような無粋な真似はしません」

十二分に反省した態度を取ると、絡繰の機嫌が収まる。そして、本来の話に戻る。

「依頼遂行の証拠をよこせ」

「分かりました。これです」

ポケットから携帯を取り出し、絡繰に写真を見せた。写真に映っているのは、頭部が切断された眼鏡の少年。一応、頭だけでなく身体の部位も撮っておいた。

「どれどれ……ふむ。おい、お前。依頼者が渡した、顔写真を渡せ」

「はっ！！」

絡繰の後ろで控えていた男が、腕に抱えていた分厚いファイルか

ら数枚の紙を取り出し、絡繰に手渡す。彼はその用紙を一通り眺めてから、もう一度携帯の方を見た。

「顔の照合は一致するが、後で依頼者に見て判断してもらう。んで、この少年の横に映っているもう一つの死体は何だ？」

「それは、その少年に殺された被害者です。すみません、僕がもっと早くに彼を見つけていれば殺されずに済んだのですが……」

「はぁ、糞餓鬼が！　死んだ後まで面倒くさいこと押しつけやがって。お前、処理班に、すぐ側の死体も片付けるよう連絡しろ」

お供の男が絡繰の命令を受け、すぐさま携帯で仲間と連絡を取り合っていた。

「ったく、大人しく死んでればいいものを余計なお世話してくれおって……！」

「申し訳ございません。僕が絡繰様のお手を煩わせてしまったようで」

「謝るな。謝るぐらいなら、お前が死体の処理をしてこい」

ギロリと片方の目で睨まれ、人弟は口を閉ざした。

重い雰囲気を払拭するように、コンコンと高い音が鳴る。お供の内の一人が、依頼者を連れて戻ってきたらしい。

途端に絡繰の態度が激変する。先程までの苛々が嘘のように治まり、笑顔を作っていた。わざわざ依頼者のためにと絡繰自らが出迎え、更に、自分の手で部屋の扉を開ける。

普段の彼なら自分から扉を開けようとはしない。そういうのは決まって部下にやらせていた。自分の手でやるのが煩わしいからだ。

でも、依頼者となると話は別である。彼は依頼者に対して丁重に

持てなすのだ。

「どうぞ、入ってきてください」

丁寧になっているのは態度だけではない。しゃべり方も恭しくなっていた。

【chapter1－8】

「ささっ、こちらへ」

満面の笑顔を振りまきながら、絡繰は依頼者の女性をソファに誘導する。

女性がソファに腰掛けるまで人弟はずっと立って待っていた。絡繰にたたき込まれた、依頼者に対する誠意というものだ。女性が座ってからソファにやっと腰を落とした。

「おくつろぎしているところ、急に呼び出したりして申し訳ございません」

絡繰は人弟の横に立ち、女性に対して頭を下げた。刈り上げた金髪の髪に驚いたのか、それとも、彼の丁寧さに恐れいったのかは知らないが、女性はいえいえと激しく両手を振る。

女性は、三十代後半の若い母親だった。名前は依頼前に聞かされており、戸入静科（といりしずか）と言う。長年着こなしているのか、スーツの至る所がよれよれになっている。長い黒髪を肩から垂らし、眼鏡を掛けている。髪を短くしたら、きっとあの少年の顔と重なるだろうと人弟は思った。

疲れが溜まっているのか、静科の顔には深い皺が刻まれていた。

金箔の机のある一点を見つめながら、彼女は口を開いた。

「大丈夫です。で、あの、本当に……したのでしょうか？」

小さな声で呟いたので、途中聞き取れなかったが、何となく想像

はついていた。だから、

「はい。ご要望通り、?狩り?ました」

絡繰のように表情を作ることは出来ないから、人弟は彼女を安心させるために声を和らげて答えた。

「狩る?」

「はい。こちらの世界の業界用語で、?狩る?というのはつまり――」

「あ……そういうこと。分かりましたわ」

最後まで人の話を聞かず、静科は遮った。

人弟が何を言わんとしているのか、気づいたのだろう。

?狩る?……つまり、裏の業界では当たり前の専門用語。ここで行われている対談は、決して表の世界のことではない。日に当たることのない、血生臭いことを取り扱っているのだ。これが、鳳外ビルの本来の姿。そして、人弟の職業であった。

「念のために証拠品をお持ちしました。ショッキングな画像かもしれませんから、心して見てください。また、気分が悪くなったらいつでも言ってください。医者をお呼びする準備は出来ております」

人弟が携帯を手渡すと、恐る恐るといった感じで静科は受け取る。一度、深呼吸をして気持ちを落ち着かせてから、液晶画面に映った『証拠』を確認した。瞬間、ショックが大きかったのか、携帯をソファの上に落とす。

「大丈夫ですかッ!?」

人弟の声に静科は我に返り、慌てて携帯を拾い上げ、突き付けてきた。

「す、すみません。落としてしまって。壊れてないですよね！？」

「落ち着いてください。これぐらいじゃ壊れませんよ。平気です。それよりも、大丈夫ですか？　具合は悪くないですか？」

【chapter1－9】

「ええ、気持ち悪くはないです。むしろ、何だかすっきりしたと言うか……」

静科の言う通り、真っ青だった顔が徐々に色を取り戻していく。血の通りが常人よりも良くなったようにも見える。

「その、ありがとうございます！」

「いえいえ。当然のことをしたまでです。そう言ってくださいますと、こちらとしては嬉しい限りです」

表情では伝えられないので、人弟は立ち上がり、胸に手を当てて一礼した。

「そ、そんな畏まらなくてもいいですわ。私が？やって？とお願いしたことなのですから。でも、これで世間の皆様に、息子の汚名が広がらずに済むんですよね？」

「はい。霧戸君が、学校の生徒を？狩った？という事実は永遠に闇に葬られました。なお、霧戸君の遺体は我々の方で処理をしました。警察が動いたとしても、足取りを掴めないように工夫もしました。安心してください」

人弟は静科の手を取り、親身になって話を聞く。

ふと、手に温かい温度。彼女の瞳から頬に伝って落ちた涙だった。

それに静科は気づき、側に置いてあった使い古びたバッグからハンカチを取り出すと、人弟の手を拭いた。

「ご、ごごめんなさい。つい、嬉しくなってしまって」
「我々は、依頼者が喜んでくれることが何よりの喜びです」
決まり文句を言うと、彼女はまた涙を零していた。
「でも、残念なお知らせが一つあります。僕のミスで、もう一人の被害者を出てしまったことです」
「あっ、それは……」
「安心してください。そちらの方も処理しました。何者かに襲われたという風に装いましたので」
「よ、よかった……。ありがとうございます。なんと感謝したらいいのか……」
何度も何度も静科は頭を下げ、感謝の意を示した。
人弟は、隣で黙々と自分たちの話を聞いていた絡繰に目で合図を送る。これで全ての話が終えたという意味だ。
人弟と絡繰が場所を入れ替え、今度は絡繰が話す番である。
「静香様、すみませんが少しいいですか？」
ニコリと、見る人によっては気味悪がられるだろう満面の笑みで彼は静科に諭す。
彼女は涙を拭い、はい、と短く答えた。
「汚い話になるのですが、お金の方を払ってもらってもいいですかね？」

【chapter1－10】

絡繰は懐から用紙を取り出し、テーブルの上へ置く。
それを静科が見た途端、びくっと身体を震わせ、何故か沈鬱な表情をする。

「これは領収書みたいなものですね。サインをお願いできますかね？」

絡繰に促され、静科は用紙にペンを走らせる。その間も彼女は暗い表情のままで、決して晴れなかった。
手早く書き終えて、これでいいですか？　と絡繰に尋ねる。

「はい、結構ですね」
「なら、もう帰ってもいいですか？」

立ち上がる彼女を絡繰は手で制した。
ニコッと笑いながら、

「まだです。別に依頼者を信頼してないわけじゃないんですよ。でも……依頼の料金分をちゃんと持ってきているのか、確認したいんですよ。ですから、そこにあるケースを見せてくださいませんかね」

彼女の足下にある黒のアタッシュケースを指さす。静科がこの部屋に訪れた時に持ってきていたものだ。
それを彼女は持ち上げて、テーブルの上へ置く。ずしりと重みのある箱だった。

「ここに、言われた通りの額が入っていますわ。では、私はこれで

……」

静科は素早く席を立ち、走り出す。が、行く手には絡繰の部下がいて、彼女を拘束した。

「はっ、離して！」

「その願いは受け入れられないな。何故、そこまでして逃げるんだ？」

もう、優しい演技をしている絡繰ではない。顔は笑っておらず、真顔だった。声質は硬くなり、人を殺せそうなぐらい鋭い視線が静科の方へ向けられる。

仮面を脱ぎ捨てて本性を現した彼に、静科はヒッと短く声を漏らしていた。

札束から一枚のお札を取り出し、天井の明かりで透かして見定める、絡繰。ふむ、と一つ頷き、次のお札も同じように透かす。そして、ああ、と落胆の声を漏らす。

「束の初の一枚だけは本物で後は偽札か。……で、この落とし前はどうつけてくれるんだ？　なあ」

「絶対に後で払います！！　ローンを組みますから！　何でもしますから！　だから、見逃してください」

拘束していた部下の手を振り払い、静科は底に額を突いてお願いをしていた。それを絡繰は冷めた目で見る。

「助けるだと……？　そんな甘い話はこの世界に無いんだよ。それに――」

彼は静科の前まで行ってしゃがみ、彼女の顔を持ち上げて、意地の悪い笑顔を見せた。

「何でもするって言ったな？　なら、死ね」

その言葉を聞くと、彼女の顔が恐怖で歪み、崩れ落ちた。

「依頼者――いや、？裏切り者？を排除しろ。？処刑部屋？に連れて行け」

部下に引き摺られてこの部屋を出て行くまで、静科は嫌嫌嫌と抵抗していた。

――そして、彼女を見たものはいなくなった。

【chapter1－1】

カタカタカタと規則的な音を立てて、先生が黒板にチョークで文字を書く。
それを時鈴李利（ときすずりり）は、机に肘を突いてどこか遠い出来事のように眺めていた。

彼女だけだ、ここまで呑気にしているのは。周囲にいる生徒は先生の話と黒板の文字をノートにひたすら書き写している。期末試験まで残り一週間もないのだから当然だろう。

李利は窓の方に目を向けた。今日も元気な太陽様が、地上にいる人間共を暑さで蹂躙する。
熱にやられたのか、それとも気になったからなのか、昨日の夜の出来事が蘇った。

昨日の夜、李利は茹だるような暑さに負け、家を飛び出してコンビニへ向かった。アイスクリームが切れていたから、わざわざ買い出しに行ったのである。
寝起きのためパジャマ姿だが、この際は仕方ないと自分に言い聞かせる。早くアイスクリームを食べないと身体が熱さで溶けてしまいそうなぐらいの暑さだったから。

十二時を回り闇が一層深まってくる頃、李利は路地裏にいた。家からコンビニまでの道程をショートカット出来るから、使っていたのだ。
ただし、路地裏を通るのは学校に通学する際か、学校の帰りだけだ。夜に訪れたのは初めての経験である。

夜の路地裏は昼間とは違い人の気配がなく、不気味だった。
身体の火照りを取りたい一心で走っていると、どこからか乾いた発砲音が何発も聞こえた。そして次に、誰かの悲痛な叫び声が夜の静寂に木霊する。
何かあったのだ。確かめようかと思ったが、怖くてその場に立ち止まる。もし事件に巻き込まれてしまったらと考えたら、足が竦んだ。
「でも、困ってる人がいるなら、助けないと……」
相反する二つの感情が、李利の心にあった。
悩むまでもなく、李利は怖さより人としてあるべき道徳の方を選んだ。もし親友がこの場にいたら、「お節介焼きなんだから……。あんた、自分のことをもっと大事にしたほうがいいと思うよ？」と言われていたことだろう。
声のした暗い道を進んでいくと、そこは行き止まりだった。
その行き止まりに、二人の男がいた。どちらも自分と同い年ぐらいだろうか。まだ若さが残る少年達だった。
李利はビルの壁から二人の遣り取りを覗き見る。彼らがこっちに気づいている様子はない。
制服を着た眼鏡少年は膝を地面に付けて、全身黒色の少年に許しを請うていた。彼らの声が小さくて何を話しているかまでは詳細に聞けなかったが、少なくとも眼鏡少年の助けを呼ぶ声は聞こえた。
でも、全身黒色の少年は眼鏡少年の話など聞かず、眼鏡少年の元へ近づいていく。

ふと、黒色の少年に意識がいった。何かあると直感したからかもしれない。

黒色の少年には、人間にあるべきものがない。右腕が、肩からごっそりなくなっていた。けれど、次の瞬間には、右腕がまるで異次元の彼方から呼び出されたかのようにぽっと現れたのだ。

驚きはそれだけではない。彼の右手には、右腕同様にどこからともなく現れた刀が握られていた。彼自身の身長よりも長い刀身。電柱の光に反射し、不気味に光るそれは本物だと告げていた。

李利は突然の出来事に混乱していた。

眼鏡少年を助けなければ殺されてしまう。

なのに、危険だと非常ベルが頭の中で鳴っているというのに、足は一歩も動かない。

【chapter1－2】

そうこうしている内に刀の切っ先が眼鏡少年の首目掛けて振り下ろされる。飛び散る鮮やかな赤い飛沫。直後、ゴトッと重い物が落ちた音がする。眼鏡少年の顔がゴロゴロッと地べたをボールのように転がり、やがて止まる。

見たくないのに、意図に反して目が彼らの方向へ向けられる。

心臓が異常に早く脈を打っている。自分でさえも分からない裡なる衝動が沸き起こる。恐怖でもない、怯えでもない、緊張でもない何か。

――例えるなら、そう。まるで、恋にでも落ちたかのような。

恋を経験したことがないから、恋とは一体どういうものなのかは分からない。けれどこれがそうなのだろうという確信があった。その確信がどこから来るのか定かではないが。

確かなことは、釘づけになるぐらい目が向けられたこと。

あの、全身黒色の少年に。

（……ああ、彼なら私の母親を殺してくれるかもしれない）

「ねぇ、李利ー！」

「……」

「李利ってばぁー！！」

「……」

「そうやって、あたしのこと無視するんだね！　いいよ、もう、イ

タズラしちゃうから！　えい！」

――ぷにゅぷにゅ。

「……ひゃッ！」

突然の予期せぬ出来事に、李利は素っ頓狂な声を上げて席を立った。背後には、妙に馴れた手付きで自分の慎ましい胸を揉みしだく親友の姿。

貞操を守るべく、腕を交差させて胸をガードした。

「なっ、何すんの、さつき！　馬鹿！　変態！　痴漢！　えっち！」

少し涙目になりながら、李利は上目遣いでさつきに抗議する。えへへと、彼女は可愛いらしい笑みを浮かべていた。

彼女は月宮（つきみや）さつき。李利が桜坂高校に入学してから知り合った仲だ。髪を赤茶色に染め、編んだ前髪を顔の横に垂らしていた。人懐っこい笑顔が印象的で、男性陣だけでなく女性陣にも受けが良い。運動をやっているからか、引っこんでいるところは引っ込んでいて出ているところは出ている、完璧なプロポーション。……李利はそれを見る度に、自信が萎れていくのだ。

「だってー、何言っても聞いてくれないんだもん。てか、ちょっと大きくなった？　Ａマイナスからぐらいにはなった気がする」

さつきはタコのように奇妙な手の動きをする。残念ながら掴めるほどのサイズは無かったのだ。

何で触られて貶さなければならないのか、不条理に疑問と悔しさを覚える。

「なーにトンチンカンなこと言ってんの。もうとっくに放課後だよ？」
「えっ？」

さつきに言われ、辺りを見回した。先生の姿は既にない。生徒の中には帰り支度を始めている人さえいた。窓の外から入り込む寂しい橙色が教室内を優しく照らしていた。

「ぼーっとしちゃってさー。何？　今日のあんた一体どーしちゃったの？」
「どうしたって、何が？」
「だーかーらー、はぁ。本人がこれだもんね、気づいてるわけないか。今日の李利色々とおかしいよ。授業中ずーっと浮かれない顔していたし。あたしの言葉も耳に入ってないようだったし。もしかして、好きな人でも出来たー？」

意地の悪そうな、でも決して人を不快にさせない笑みで、彼女は問い掛けた。

【chapter1－3】

瞬間、沸騰したヤカンのように顔が火照ったが、動揺を見せないよう小さな胸を出して毅然と振る舞った。

「そそそ、そんなわけない。だっ、断じて違うからな！」

「動揺が声に滲み出ていますよ、奥さん。そうかそうかー。遂に、りりーも乙女心というものを知ってしまったかー」

ふふーんと、何やら得意げに鼻を鳴らすさつき。彼女のその態度を見て、少しむっとする。

「その話はもういいから。こっちに来なさい」

「久しぶりの説教ですかー？　からかっただけなのにー。怖いよ―、そっちに行きたくないよ―」

「違う。説教してやりたいけど、今回は特別に許してあげる。……えっと、起こしてくれて……いや、放課後だと教えてくれてありがと」

「ちょっと今日のりりー怖いよー。なーんか裏がありそう。彼女がこんな優しいわけがない、みたいなラノベの名前がありそうなぐらい怖いよー」

とか何とか文句をぶつぶつ垂れながらもさつきはこちらに来た。

「ほら、ネクタイが曲がってる」

李利が手を伸ばすと、さつきはびくっと身体を震わせた。けれど抵抗しない。

ネクタイを解いて、もう一度最初から結び直してあげた。

「ありがとう、りりー。さすが第二のお母さん」
「失礼な！　お母さんと呼ぶのは止めろとあれほど言ってるだろ！」
「だって、りりーお母さんみたいなんだもん。ネクタイを直してくれたり、髪の毛を梳いてくれたり。面倒見良すぎるよー。でも……こんな優しくて可愛いお母さん一人欲しいかも！」

両手を合わせて、キラキラと目を輝かせるさつきの頭にチョップした。

「イタッ！」
「冗談はよせ。さつきのお母様が可哀想だ」
「えー、ホンキで言ったのにー」

親友のさつきと馬鹿話で盛り上がっていると、大声を上げてこちらに近づいてくる一つの影。

「ななななんだってえええええええええええ！」

男子生徒は、李利達の側で止まると膝に手を突いて息を切らしていた。

「あ、志村（しむら）じゃん」

さつきが気軽に男子生徒の名前を呼ぶ。すると、彼は顔を上げ笑顔を見せた。

「おう、さつきちゃん。それに、りりー！」
「りりーと呼ぶな。時鈴さんと言え」
「厳しいなー、りりーは」

「厳しくない。これが普通なんだ、さつき」

李利は男子生徒を見る。彼は志村颯斗（さつと）。李利と同じクラスの生徒。入学時から二学期になるまで一緒のクラスだった。髪を茶髪に染め、制服を着崩し、いかにもチャライ男を演出。本人はそれが格好いいと思っているらしい。李利には彼の感性が分からなかった。

【chapter1－4】

「で、何で君がここにいるわけ？」
「いやさ、りりーが――」
「時・鈴・さ・ん・だ」

間髪入れずに、李利は志村の発言を遮った。彼はアハハと悪気も全くない笑顔を作る。

「時鈴さんに好きな人が出来たと聞いて急いでやってきたんだ。本当なのかい？」
「……！」

瞬間的に顔に熱が宿った。鏡を見なくとも自分の顔が真っ赤になっているのが分かる。

「嘘だよな……。ねぇ、どうなのさつきちゃん？」
「どうなのって言われてもー。さー、詳しいことは知んなーい。でも、ホントなんじゃないかなー、この様子を見る限りだと」

二人して疑問の眼差しを自分に向ける。何も悪いことはしていないはずなのに、何故だか悪いことをした気になってしまう。

「というか、そういった情報は一体どこから手に入れてるんだ？」
「噂好きの俺だから、そんくらいの情報簡単に耳に入ってくるよ。で、実際のところは？」
「君に好きな人が出来たかどうか教える道理はない！　さつきならまだしも！」
「うう、なんたる酷い仕打ち。俺凹みそう」

「ごめんごめん。言い過ぎた。悪かった。ほら、これを使え」
さめざめと泣く志村の傍らに寄り、ハンカチを手渡した。
ハンカチを受け取ると、彼はちんっと鼻を勢いよくかんだ。

「おいそれ私のハンカチ……」
「あ、ごめん時鈴さん。ついうっかり」
「うっかりって……。まあいい、洗うから。というか、噂好きの君のことだろう……もっと役に立ちそうな情報はないのか？」
「うーん」
顎に手を当てて、志村は考え込みだした。数秒の後、ぽんと手の平を打って、人差し指と中指を立てる。

【chapter1－5】

「二つほど話をしようか。まずは一つ目。今、世間を騒がせている【連続殺人鬼】のことだ」

何でも彼が言うには、今朝方連続殺人鬼の被害者がまた出たとのニュースがやっていたそうだ。これでその連続殺人鬼の犯行は合計七人目に及ぶ。被害者はどれも共通して男性だった。

この事件がどうしてここまで大きく取り扱っているのか。それは、発見された死体の損傷具合が異様だからだ。連続殺人鬼が犯したと思わしき猟奇的事件には、どの死体にも熊に食われたような大きな歯形が残っていた。

だから連続殺人者でもなく、連続殺人犯でもなく、連続殺人？鬼？なのだ。人間ではない、この世ならざるものの手による殺害だから。

「更に、この事件には、共通の目撃証言が多く寄せられているらしいよ。何でも、三十代後半の女性が現場付近に必ずいるらしい。もしかしたら、連続殺人鬼の犯人は……」

怖さを誘発しようと、志村は声をわざと潜める。その雰囲気にあてられて、さつきはごくりと唾を飲み下した。彼はゆっくりと口を開いた。

「熊かもしれない」

「ひゃあああああ！　って、そんなわけあるかーい！」

「でも、気をつけることに超したことはないよ。特に夜道とか」

「うーん。でもさー、被害者って全員男なんでしょー？　だったら、志村が気をつけた方がいいんじゃないかなー」
「確かにそうだな……。俺も殺されるかもしれない！　なんてたってイケメンだから！」
「自分で言うの、どうかと思うよー。別にイケメンじゃないしねー」
「酷い……」
「あっははー」
「……」
楽しい二人の雰囲気とは違い、李利は表情を曇らせていた。それに気付いたさつきが「どうしたー」と、聞いてくる。
暗い思いを払拭しようと、無理矢理笑顔を作った。
「いや、何でもない。気にしなくていい」
「気にするなって言ったってー、そんな顔してたら気になるよー」
「大丈夫、平気だ」
とは言ったものの、全くもって平気ではなかった。
――彼らに言えるわけがなかった。連続殺人鬼の正体が自分の母親だなんて。
李利の母親、時鈴（みれん）巳煉は、李利の父親、斧樂（ふがく）とのもつれで彼を殺してしまい、家を出て行ったきり行方を眩ました、はずだった。蓋を開けてみれば、【連続殺人鬼】という通り名が付けられるほど、有名な殺人犯へと昇格してしまったのだ。

【chapter1－6】

何故それを李利自身が知っているのか。

現場の目撃証言から、三十代後半の女性――巳煉と同じ年齢――が挙がっているからというのもあるが、連続殺人鬼による最初の被害者が斧樂だったからだ。斧樂は熊並の大きな獣によって食い千切られて死んでいた。それそれはもう無残な姿で、人の死に尊厳というものがない。

第一発見者が李利で、その残酷な仕打ちを見た瞬間、嘔吐したのを覚えている。

どうして斧樂を殺したのか、その理由を聞かされていない。巳煉は何も告げずに去ってしまったからだ。

だから知りたかった。奇行に走った理由を。

それに――。

「お母さんを殺さなければならない……！！」

これ以上、被害者を出さないために。人々に迷惑を掛けないために。

彼女らに見えないところで李利は握り拳を作った。

「志村君、もう一つの話題は？」

「あ、うん。もう一つの情報は、なんというか、まぁ俺らには関係ないんだけど……」

「いいから、話してくれ」

李利に疑問の眼差しを浮かべていた彼だったが、渋々といった感じで口を開いた。

「殺人犯が何人も殺される事件を知ってるかい？」

「どういうことだ？」

「まず、【機関】のことは二人ともご存じ？」

「知らん」

「知らなーい」

同様の反応を示す二人に、志村はヤレヤレと両手を広げておどけてみせる。

「全く、仕方がないな。情報通のこの俺様が教えてあげるよ」

彼によれば、機関というのは、警察のような治安を守る自治組織のことらしい。

但し、機関は警察とは勝手が違うのだと言う。機関の仕事は、殺人犯を取り締まること。警察でさえも厄介だと思われる凶悪犯罪を主に扱う。機関に雇われているほとんどの人間は、プロの殺し屋だけで構成されている。

警察は、殺し屋だらけの機関を危険な存在と見なしており、排除したい組織ナンバーワンであるため、ただいま絶賛犬猿の仲であるらしい。

「というわけなんだ。二人とも分かったかい？」

【chapter1－7】

「機関のことは理解した。一体どこからそういう情報が手に入るのか、あえて聞かないことにする。けどそれが、殺人犯が何人も殺される事件とどう繋がるんだ？」
「その事件が、機関の手によるものじゃないってことだよ」
「ということはー、機関とは違う殺し屋の組織が動いているってことー？」
「そう！　その通りだよ、さつきちゃん！」

人差し指をさつきに突き付けて、力説する志村。それから彼は窓際に向かい、橙色に染まる空を眺めた。カーカーと、カラスの侘びしい鳴き声が聞こえてくる。

「もうすぐで日が暮れるな」

その言葉にさつきと李利は窓の外を眺め、うんと頷いて同意をした。彼は振り返り、続ける。

「機関とはまた違った第二の謎の組織が動いていると言ったよな？　これは真偽の怪しい匿名掲示板からの情報なんだけど、実際にその殺し屋に依頼を頼んだ人の書き込みがあったんだ。数件だけじゃないよ、何百件とあったんだ。しかも、昨日起きた？殺人鬼殺害事件？に関与してる依頼者が書き込んでいたのを見た。何故か、すぐにその書き込みは消されていたけど……。だからまぁ、本当にあるんだと確信したよ」

志村は、自分がしてやったりみたいな得意げな顔で話し出す。

彼の話を聞いて、李利は昨夜のことを思い出していた。
殺人現場、おそらく殺人鬼殺害事件の現場に自分がいたことは、到底この場で言えるわけがない。でも、志村の情報が確かだと分かった。だから。

「志村君、その謎の組織がどこにあるのか知っているか？」

まさか興味を示すとは思わなかったのか、志村は驚いた顔をしていた。

「えっ？　知りたいのかい？　もちろん知っていけどさ」
「ああ、なら教えてくれ」
「ま、まぁ時鈴さんの頼みなら……喜んで！」

嬉しそうにする志村に、李利は首を傾げる。さつきはというと、「二人とも難儀だねー」と、何やら楽しげな笑みを浮べていた。

†††

学校を出た李利は、さつきと志村と分かれて住宅街を走っていた。
いつの間にか空の色が変わっている。さっきまで明るい橙色だったのに、今は、暗い紫色になっていた。
道路には一人分の小さな影が映り、帰宅途中だったのか、サラリーマンやら学生やら主婦やらが横を通り過ぎる。
猫やカラスといった動物さえも家へと帰り支度をしているというのに、李利はその逆。今から家ではない、とある場所に向かっていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3851z/

感染殺人～バイオキリング～

2012年1月6日16時51分発行